

風韻堂コレクションの両頭石槍

齋藤 岳¹⁾

Double Head Point collected from unspecified site from Fuindo Archeological Collection
SAITO Takashi

キーワード：風韻堂コレクション、両頭石槍、青森市宮田、縄文時代晩期

はじめに

青森県立郷土館は、故大高興氏から寄附を受けた風韻堂コレクションを所蔵している。

本稿では、これまで写真でのみの紹介であった珪質頁岩製の両端に先端部を持つ小型の石槍を、図化し若干の考察を加える。つがる市亀ヶ岡遺跡の4点の釣針形状の異形石器と共に写真撮影された資料である（青森県立郷土館 2001）。

風韻堂コレクションの目録（青森県立郷土館 1973）では、出土地点が青森市宮田？」と記載されている。青森市で宮田遺跡の名称で古くから知られてきたのは宮田集落に隣接する矢田集落の小字山野井の長森遺跡である。慶應義塾大学の清水潤三が宮田遺跡として 1950 年に発掘調査を行い晩期中葉の土器・石器が出土した（清水 1955）。宮田集落と矢田集落は隣接し、昭和 30 年に青森市に編入されるまでは同じく東岳村を構成していた。そして東岳村の村役場は宮田集落に位置していた。

風韻堂コレクションに入ったと考えられる昭和 20 年代から 40 年代には、宮田の縄文時代晩期遺跡出土品といえば、長森遺跡が想定され、宮田を含む周辺地域を包括する形でイメージされたのではないかと筆者は推定している。風韻堂コレクションには多数の「宮田」出土の資料を含むが、土器、土器片、土版、岩版などはすべて縄文時代晩期のものである。本資料は？付きであるが縄文時代晩期の可能性が高いと考えて考察する。

同様の形状を持つ石槍で、広く知られてきたのは、縄文時代前期前葉という時代性と結びつく「袂入尖頭器」であった（田中 1995）。北海道の渡島半島部から青森県域にかけては、分布の空白域（田中 1995）の状況が続いた後、函館市豊原（4）遺跡（田中 2012）が紹介され、青森市三内丸山遺跡の異形石器は、当該石器と形状が類似すると紹介された（久保田 2013）。

本稿では、渡島半島の事例を扱うことから、名称として北海道で使用される「両頭石槍」を基本的に使用する。

1 風韻堂コレクションの両頭石槍の図化と観察

両頭石槍は図 1 に図化した。計測値は、長さ 5.6cm、幅 2.5cm、厚さ 0.6cm で重量は 6.7g である。当館の受け入れ番号は 543-9554 である。風韻堂コレクション番号は 31-15 であり図 1 の写真でも注記を確認できる。良質な黒色の珪質頁岩製である。特徴は次の 3 点である。①横幅に比して厚さが薄い②上部の槍先部分と下部の槍先部分の大きさが近似する。③中央部の幅は短く細い。中央部に線を引くと上下は線対称となる。

本稿では、本資料が帰属する可能性のある青森県域の縄文時代晩期の資料を対比資料として図示する。

北海道渡島半島部と青森県域の他の時期の資料は、集成作業を継続中であり、稿を改めて記載することとしたい。

2 北海道及び青森県域を除く本州の研究史

当該石器は本州では両尖匕首（山内 1972）または袂入尖頭器（田中 1988）が主に使用されてきた。研究の進展に伴い、袂入石槍（橋本 2023）という名称も提案されるようになった。

研究史については、山内（1972）及び田中（1995）が、北海道のものは立川（1998）がまとめている。

こうした中で、両頭石槍 7 点が出土した北海道木古内町幸運 5 遺跡の報告書が刊行された事は特筆され、研究の転換点となると考える（（公財）北海道埋蔵文化財センター 2023）。うち黒曜石製のものが 4 点であり、3 点の産地分析が行われた。縄文時代中期後葉のノダップⅡ式期の 2 点の内訳は白滝産、赤井川産が各 1 点であった。全国的な盛行期である前期前葉のほかに、北海道では中期後葉の時期にも盛行することが明確になった。ほかに詳細時期不明で十勝の上士幌産と推定されたものがある。石槍は石器製作時の減耗率が高い。産地及びその周辺遺跡で半製品・完成品となった黒曜石製品が、消費地の集落へと運ばれたと考えるのが自然である。ノダップⅡ式は北海道の在地系の土器群である。黒曜石産地（周辺）で加工された両頭石槍は、中期後葉には北海道全域の遺跡へ搬出された可能性が考えられる。そのため、いままですべて詳細時期不明とされてきた北海道各地の両頭石槍のなかに、中期後葉の物が含まれている可能性が出てきたといえる。来運 5 遺跡の残りの 3 点の両頭石槍は珪質頁岩製である。木古内町は珪質頁岩の産地であり、地元の石で同遺跡や周辺遺跡で製作された可能性がある。

1) 青森県立郷土館 学芸課副課長・副参事（〒030-0802 青森市本町二丁目 8-14）2)

同じく珪質頁岩を産し、北海道中央部産の黒曜石製石器が搬入される青森県域での両頭石槍を考えるうえで重要である。

青森県域での縄文時代前期前葉に位置付けられない出土例、来運5遺跡のように小形の例、珪質頁岩製のものについても、両頭石槍と位置付けることに逡巡する必要がなくなったといえる。

2 北海道の渡島半島部から青森県域にかけての両頭石槍に関する出土例

渡島半島部では、1958年の函館市サイベ沢遺跡出土の縄文時代前期の例が両頭石槍の最初の報告例である。山形県西村山郡朝日町石須部出土例(田中 1995、東京国立博物館のホームページで「両尖ヒ首」として紹介)と形状が類似する。

その後、森町御幸町遺跡、函館市臼尻B遺跡などで縄文時代後期後葉の例が報告される。さらに函館市大船C遺跡・浜町A遺跡・北斗市村前ノ沢遺跡から縄文時代後期後葉及びその可能性のある例が報告されてきた。臼尻B遺跡では土坑墓内の副葬事例も2021年に報告される。縄文時代前期から後期の時期では函館市戸井貝塚・石倉貝塚、森町オニウシ2遺跡、仁木町モンガクB遺跡、木古内町亀川3遺跡で報告されてきた。時期不明では函館市西桔梗E1遺跡例がある。

青森県域では江坂輝弥が写真紹介した、むつ市最花地区のものが最初の報告例である(江坂 1957)。

その後、黒曜石製のものでは、1979年に六ヶ所村家ノ前遺跡、1997年に佐井村八幡堂遺跡の例が報告される。その後も珪質頁岩製では、2002年に報告された青森市稲山遺跡などで出土している。

筆者が図版作成を担当した青森市三内丸山遺跡出土の北海道白滝産の長さ約21cmの大形石槍(青森県教育委員会 1998)は、両頭石槍と記載する事に逡巡し、その用語は使用していない。縄文時代中期と想定されてきたが、渡島半島部で両頭石槍が盛行する縄文時代中期後葉に帰属する可能性もある。縄文時代前期前葉とされてきた朱円式土器の下限を前期中葉までとする見解が出され(村本 2013)、縄文時代前葉中葉まで遡る可能性もでてきた。

3 風韻堂コレクションの両頭石槍の位置づけ

図2に青森県域の縄文時代晩期及びその可能性のある資料を図示した。いずれも珪質頁岩製であることが特徴である。

三戸町泉山遺跡の出土品の中に、亀ヶ岡遺跡の両頭石槍に類似する例がある。泉山遺跡は縄文時代中期と晩期を主体とする遺跡であり6点報告されている。縄文時代晩期例では青森県細越遺跡でも出土している。北津軽郡板柳町土井(1)遺跡のものは有茎石鏃に挟りが両側から加えられている。両頭石槍の影響を受けた可能性があり、類品として図に加えた。

おわりに

本稿では、風韻堂コレクションの青森市「宮田？」出土の珪質頁岩製の石器は、その類例から縄文時代晩期の両頭石槍として矛盾がないことを概ね説明できたと考える。引用参考文献の発掘調査報告書名については、図示した縄文時代晩期のものを除いて記載できなかった。

今回、詳述できなかった両頭石槍(両尖ヒ首、挟入尖頭器、挟入石槍)についての研究史と、北海道の渡島半島部から青森県域にかけての縄文時代全体の両頭石槍の集成と計測値は、準備が整い次第、別稿で記載したい。

引用参考文献

- 青森県立郷土館 1973 『風韻堂コレクション目録』 41 頁
 青森県立郷土館 2001 『青森県立郷土館 収蔵資料図録-第3集・考古編(2)-』 112 頁 写真 0729
 江坂輝弥 1957 『考古学ノート 2 先史時代(II)』 130 頁 挿図 57 日本評論新社
 久保田健太郎 2013 「挟入尖頭器の形態形成」『考古学ジャーナル』 637 号
 (公財) 北海道埋蔵文化財センター2023 『木古内町 幸運5遺跡』
 清水潤三 1955 「青森県東津軽郡宮田遺跡」『日本考古学年報』 4
 立川トマス 1998 「両頭石槍について」『時の絆 石附喜三男先生を偲ぶ [道を辿る]』 石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会
 田中英司 1995 「挟入意匠の石器文化」『物質文化』 第59号
 田中英司 2012 「石器文様論」『千葉大学考古学研究室 30周年記念考古学論攷Ⅰ』 179-204 千葉大学考古学研究室
 橋本勝雄 2023 「大木系石器群の関東以西への南下とその様態—石匙・石槍・槍状石器—」『茨城県考古学協会誌』 第35号
 村本周三 2013 「斜里平野における縄文時代前期の石器群」『北海道考古学』 第49輯
 山内清男 1972 「両尖ヒ首」『山内清男・先史考古学論文集・新第5集』 所収
 板柳町教育委員会 1993 『土井Ⅰ号遺跡』 32 頁 第17図
 青森県教育委員会 1979 『細越遺跡』 42 頁 図28
 青森県教育委員会 1996 『泉山遺跡Ⅲ』 79 頁 第66図
 青森県教育委員会 1998 『史跡 三内丸山遺跡 年報3』 43 頁 図の左上
 五所川原市教育委員会 2017 『五月女菰遺跡 第2分冊』 316 頁 図Ⅲ-4-5-1

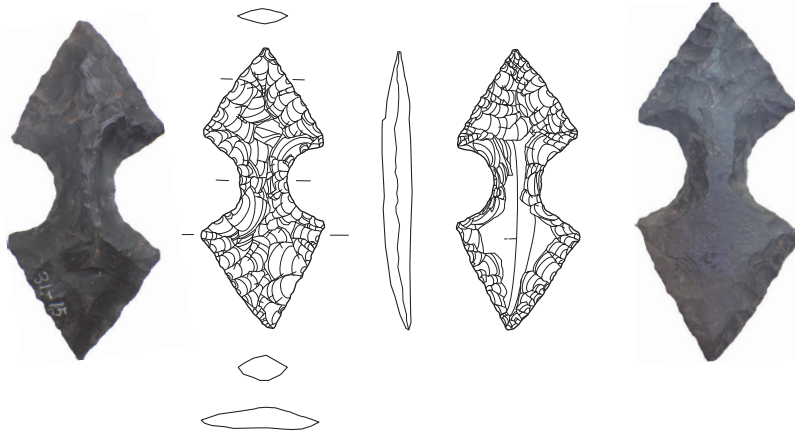
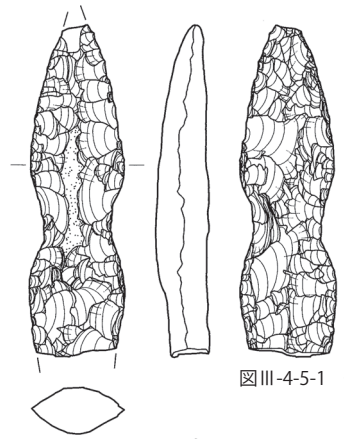
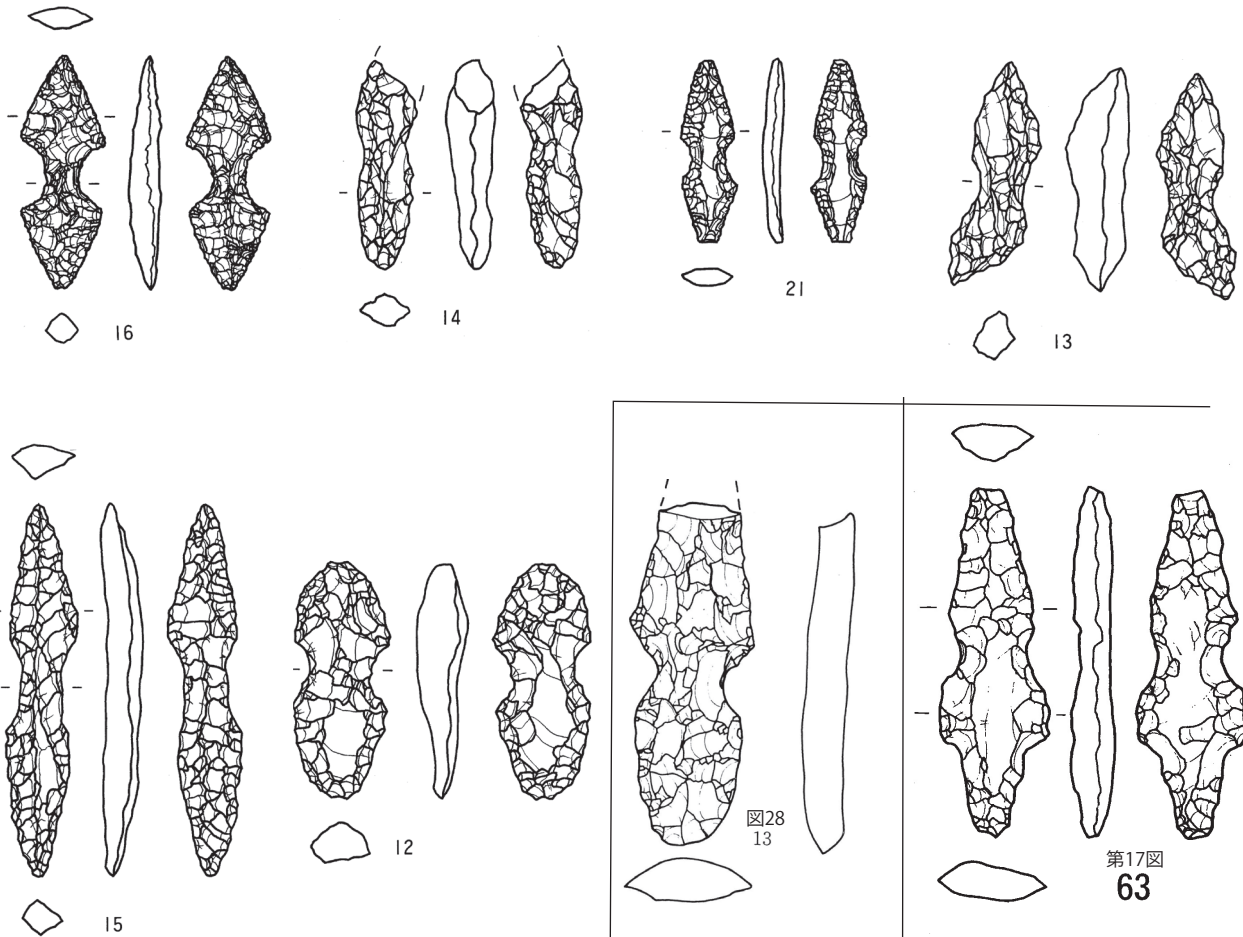


図1 青森市宮田?出土両頭石槍



図III-4-5-1¹

五所川原市五月女菰遺跡



三戸町泉山遺跡

全点とも第66図

図番号は発掘調査報告書のものを使用

青森市細越遺跡

板柳町土井(1)遺跡

2/3

0 5cm

図2 青森県内の縄文時代晩期の両頭石槍

青森県立郷土館研究紀要 第49号(令和7年3月) 正誤表

頁	行・図番号	誤	正
48	本文30行目(下から10行目)	幸運 5 遺跡	幸連 5 遺跡
48	本文37行目(下から 3 行目)	来運 5 遺跡	幸連 5 遺跡
49	2 行目	来運 5 遺跡	幸連 5 遺跡
49	38行目(下から13行目)	幸運 5 遺跡	幸連 5 遺跡
50	図 1 左上写真	上下が逆	180度回転させた状態が正しい